

平均値では、男児の母乳群と女児の混合、母乳群は毎年ほぼ上位に固定した傾向が見られた。今後の経過にどのような変化が見られるものか、なお、継続研究を試みる計画である。

E-12 乳幼児の身体発育ならびに精神発達に関する逐年的研究（第7報）  
—栄養方法別に見た満5年児の発育状況について—

鹿兒島大教育 齋藤 マサ

1. 本研究は、乳幼児の身体発育と精神発達の関連を知る手がかりとして、乳児初期の栄養方法、すなわち母乳、混合、人工の三栄養群間の身体発育状況ならびに精神発達状況について、逐年的研究のもとに比較検討を試みた。

2. 本研究の対象児は、一応の目標のもとに選出したもので、5年児現在、男児55名、女児54名計113名である。今回の5年児の調査は、昭和35年度に開始以来6カ月毎に第16回目に行なったものである。身体測定ならびに精神発達検査は、対象児の生年月日に応じて各家庭で実施した。

3. 研究成果を概略すれば、身体各部の測定の平均値を三栄養群間で比較した結果、男児の上膊囲を除けば、女児をふくめていずれの発育においても有意差は認められなかった。しかし、1年児から5年児にいたる発育・発達過程において男児と女児はそれぞれの特徴を示した。すなわち身体発育状況においては、女児の混合群は常に優位の傾向を辿っているが、男児の母乳群は毎年著しい伸長を示したが、混合群は4年頃より不振となるなど群間の固定化は見られなかった。しかし、知能指数の